

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：37303

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14271

研究課題名（和文）日本学研究を担う海外大学若手人材育成：往還する省察的学びのモデル提案と実践研究

研究課題名（英文）Fostering Young Scholars of Japanology at Overseas Universities: Proposed Model for Reciprocal Reflective Learning and Practical Research

研究代表者

佐野 香織 (Sano, Kaori)

長崎国際大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：80774398

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本学研究を担う海外大学日本学科の若手人材育成の基礎研究、および育成モデル試案構築を目的とするものである。調査を通して以下を明らかにした。日本学研究を担う若手人材は、自分が受けてきた日本語教育を踏襲していること、その地の政治・社会状況を背景に多様な経験を重ね、それぞれの学びと教育観をで探りてつくっていること、日本人教員とは別の教員コミュニティ希望していること。これらをふまえて、若手人材による協働省察の機会のデザインを行い試行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで海外日本学分野における人材育成研究、教師教育研究はほとんどされてこなかった。本研究は日本学科を修了した若手人材育成に焦点をあてその方法を検討、提示できたことに特色がある。近年の日本語教育者の専門性に関する議論、日本国外も含む世界の教師教育に寄与できたことに意義があると思う。

研究成果の概要（英文）：This study aims to conduct basic research for the development of young scholars in Japanology at overseas universities. These scholars will be responsible for advancing Japanology and constructing a trial model for faculty development. Through this study, we found the following: (1) young scholars in Japanology follow the Japanese language education they have received, (2) they have diverse experiences in the local political and social contexts, and are exploring their own learning and educational perspectives, and (3) they prefer a teacher community different from Japanese faculty members. Based on the above, we designed and piloted an opportunity for collaborative reflection among young scholars.

研究分野：日本学 教師教育 日本語教育

キーワード：日本・日本学研究分野の若手人材育成 世界の日本語教師教育 省察的実践論 協働省察 ナラティブ 日本学研究者のキャリア

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 日本学研究を担う海外大学若手人材育成：往還する省察的学びのモデル提案と実践研究

### 1．研究開始当初の背景

研究開始当初、世界中から日本、日本文化、日本語に興味を寄せられている中、この分野を担う日本学分野の人材育成は急務であったが、文献学研究が中心の海外大学日本学科では、教授活動方法は扱っておらず、大学院生教育における課題となっていた。その理由として、日本学、日本語教育を包括的に担う中心的役割は現地の日本学研究者が果たしているが、大学院では教授活動方法の指導は行われていないことが挙げられる。また、言語教育は母語話者によって行われるべきであるというネイティブスピーカー信仰も根強くあり、日本語非母語話者の人材育成が進まない現状もあった。次世代の日本学研究、日本語教育を担う海外若手人材は、伝統的な教育方法を踏襲せざるを得ない状況にあることが課題となっていたといえる。学際的な学びを担う日本学において、国内外を問わず、学び手の多様性に基づく学びの場の創成をする新たな枠組みが求められていた。

### 2．研究の目的

次世代の若手人材育成につなげ、持続可能なモデル化をめざすために、東欧の日本学科を対象に次の3点を明らかにすることを目的とした。

日本学科卒業後の大学・大学院生の教育観、学習観

日本学を専門とする研究者・教育者の教育観、学習観

若手人材のための協働探究の機会、仕組みの検討

### 3．研究の方法

目的 については、日本学研究、日本語教育に関わる職に就く東欧の日本学科大学を卒業生した大学・大学院生を対象にインタビュー調査を行った。目的 については、文献調査を行い、まとめた。また、東欧の若手日本学科教員を対象にしたインタビュー調査を行った。目的 については、 、 の調査結果をもとに、若手人材のための協働探究の機会をデザイン、試行した。

### 4．研究の成果

研究の成果を目的の3点から記述する。

日本学科卒業後の大学・大学院生の教育観、学習観

インタビュー調査結果から、「自分が受けてきた日本語教育の踏襲」、「憧れのロールモデルとしての日本学研究者・教員」、「個で行う手探り教育」、「日本人教員とは別の教員コミュニティ切望」の4つのテーマが浮かびあがった。このテーマ間の関係性には、「日本語教員」というアイデンティティ形成、日本における日本語「ネイティブ」の日本語教師養成が中心

となっているという構造的問題があること、日本において日本語「ネイティブ」が日本語を教えるモデル形成への批判的検討の必要性も指摘した。

この成果については、学会発表を行い、フィードバックを受けた上で論文としてまとめている。

日本学を専門とする研究者、教育者の教育観、学習観

#### 文献研究

日本学を専門とする研究者の文献研究を通して、日本語の学びの経験が言語化されたものを分析、考察してきた。そして、研究者の言語観、学習観の変遷は、歴史、社会・政治的な背景と共に研究者個人の人生とつながりながら、自らの経験から「創ることで学ぶ」言語観、言語学習観を編んできたことを見いだした。このことは、日本学分野の研究や、ことばの学習として日本語を学ぶ人々への示唆となる。既存の学びを無批判に継ぐのではなく、自ら学びを創る視点から考察した（佐野 2019）。

#### インタビュー調査

東欧の大学において 1960 年代から日本学研究と共に日本語教育を支えてきた日本学研究者、1990 年代以降の日本学研究、日本語教育を担う若手日本学研究者にインタビュー調査を行った。きっかけとしては「日本文化」「日本」を知りたいという関心から始まっていること、しかし、研究には社会情勢や社会構造、状況が深くかかわっていること、その時々活動がどのように研究と日本語学習を切り開いていくか、当地にあった「日本学科」の日本学研究と日本語教育は模索の連続であったことが浮かびあがった。また、日本学研究者として、「日本語」は必要であるのかという苦悩も見えてきた。

若手人材のための協働探究の機会、仕組みの検討

、 の調査結果、調査課程から、日本学科での学びや背景を知る者と経験や実践、キャリアや人生を語る機会を希望していることが分かった。コロナ渦ということもあるが、異なる地域の者が対面で話すことの難しさから、オンライン上で小グループでの試行を試みた。

これらの結果から、実践の共有が学びとアイデンティティ、教育観、学習観につながること、協働省察、オートエスノグラフィといった実践の共有方法を探る検討の重要性を示唆した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 米本和弘・佐野香織	4. 巻 25
2. 論文標題 国際共修において教員が描く境界とその境界へのかかわり方の問い直し 2 大学間の教育実践での教員の協働探究を通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 留学生交流・指導研究	6. 最初と最後の頁 49-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 佐野 香織、兵藤 智佳、小泉 香織	4. 巻 19
2. 論文標題 「体験の言語化」の「ふり返し」を社会に拓き重ねる - 往復書簡と実践の跡づけによる長期重層的協働省察記述の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化教育研究	6. 最初と最後の頁 264～280
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14960/gbkkq.19.264	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 佐野香織	4. 巻 No.132
2. 論文標題 「日本学」研究者の学びをたどる 経験からことばの学びを創るということ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 65-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐野香織	4. 巻 24
2. 論文標題 日本語教育におけるナラティブによる教師教育の展望	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 長崎国際大学論叢	6. 最初と最後の頁 13-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 佐野香織
2. 発表標題 日本語教育におけるナラティブによる教師教育の展望
3. 学会等名 第25回ヨーロッパ日本語教師会シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐野香織
2. 発表標題 日本学研究と日本語教育をつくるポーランド ワルシャワ大学東洋学部日本学科の道の一考察
3. 学会等名 第33回日本語教育連絡会議（オンライン）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 兵藤智佳・佐野香織
2. 発表標題 わたしの体験からわたしたちの問題へ～「体験の言語化」を通じての試み～
3. 学会等名 言語文化教育研究学会第8回研究集会（オンライン）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 兵藤智佳・岩井雪乃・平山雄大・二文字屋脩・和栗百恵・佐野香織・河井亨
2. 発表標題 「体験の言語化」実践におけるオンラインの課題と可能性
3. 学会等名 第27回大学教育研究フォーラム（オンライン）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kaori Sano
2. 発表標題 Japanese-style 'Well-being': Clues for Better Coexistence with Diverse Peoples
3. 学会等名 The 13th Annual Days of Japan at the University of Warsaw, An International Conference to Commemorate 100 Years of Japanese Studies at the University of Warsaw (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐野香織
2. 発表標題 大学日本学科卒業生はどのように「日本語教師」になっていくのか ハンガリーの大学日本学科出身の新人日本語教師インタビューから見てきたこと
3. 学会等名 The 17th International Conference of the European Association for Japanese Studies Japanese Language Teaching Section 第26回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐野香織
2. 発表標題 「私」を語る教師が自分をひらき語ることの「諸刃の刃」性」パネルセッション「私」を語る行為—教師のオートエスノグラフィーから見えること—
3. 学会等名 日本語教育学会2023年度秋季大会パネル(中井好男・佐野香織・嶋津百代)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐野香織	4. 発行年 2023年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 138
3. 書名 越境する日本語教師と教師研修 実践を省察するラウンドテーブル 第5章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------